〔書　評〕

田中章夫著

『日本語の位相と位相差』

前　田　富　祺

一

本書の「はじめに」には，

> 日本語の位相については，主として用語の面に見られる差異や対立の問題としてとらえられることが多い。しかし，位相によることばの違いは，単に語彙の差異・対立に止まらず，発音にも語法にも，文章・文体にも，さまざまな形で現れてくる。さらには，言語生活のあり方や言語行動の質の違いとして，また，時には言語に対する意識や価値観の対立として認められることもある。

とあり，「本書では，そうした，多様な位相上の差異や対立を，できるかぎり多面的に観察していくことを心がけた。」と述べている。

国語位相論は菊沢季生によって初めて唱えられたもので，西欧の言語理論を離れて日本独特のものとして展開するものであった点で注目されるのである。しかし，個別に位相語の各分野の研究は盛んに行われてきたが，全体的に総合し，位相論の在り方を論ずることについては遅れているように思われる。その点で，本書は「はじめに」に記されているごとく，語彙の問題にかぎらずに，さまざまな形で現れてくる位相の違いを，多面的に把えようとしていることが注目されるのである。

二

第一章の「位相と位相差」は，田中章夫の位相についての考え方を示したものである。田中章夫は，言語上の差異の代表的なものとして，地域差と時代差とを挙げ，これらは独自の言語的世界をなす閉じた系としての対立であるとする。これに対して，「位相上の差異というものは，それぞれが，一つのまとまりのある言語的体系として存在している各地の方言や，各時代の言語の間にみられる対立とは，異質なものと考えられる。」と述べる。菊沢季生の『国語位相論』（『国語科学講座』昭和8年）の位相論は，様相論と様式論とに分けられ，様相論が（a）社会的・心理的――階級方言・特殊語，（b）地域的――（地域）方言，（c）生理発達的――児童語に分けられるのに対し，田中章夫は方言は含めるべきでないとするのである。

方言（たとえば，津軽方言）が独自の言語体系を作る閉じた系と考えられるという考え

方は大筋として納得出来る。ただ，それは津軽方言というものを体系として考える時に言えることであって，津軽出身の人が東京で働いているような場合を考えてみると，閉じた系とばかりは言えないようなことが起りうる。津軽の言葉が東京の言葉に取り入れられたような場合を考えてみることも必要であろう。

また，田中章夫は「幼児語なら幼児語それ自体を，一つのまとまりのある言語的体系として扱うことは，たしかにありうるが，幼児語と成人語あるいは老人語との関係は，本来，三者相互に共通部分をもつ，開いた系の間の対応とみるべきものであろう。」とするが，幼児語の語彙体系というものを考える場合に，時期によっては「三者相互に共通部分をもつ」と言えるかどうか疑問が残る。同じ語形のものがあるとしても，語義や用法はまったく異なるのである。[注1] しかし，成人語を中心として考える場合に，成人が幼児との対話の中で理解する（時に使用する）幼児語（これが定着すれば育児語となる）は位相語として位置付けられることになろう。このように考える時に，図1-1の「位相差と地域差・時代差」は，閉じた系と開いた系との違いを模式的に分りやすく示したものではあるが，あまりに図式化されているとも言えよう。

たとえば，(A)の位相差は，成人語，老人語，幼児語がそれぞれ同じ大きさの円で示されており，重なりの部分があまり大きくない。これは，「位相差は，概念としては，大なり小なり共通部分をもつ関係であり，集合論的にいえば，「交わり（離接）」の要素を含んだうえでの対立（A）である。」という田中章夫の考え方をよく示しているのである。この図は，成人語，老人語，幼児語が対等の関係で対立していると考える時にもっとも分りやすい。私自身，集合論を語彙論の基礎において考えていたので，このような考え方には共感が持てるのである。

しかし，私は最近，いろいろな言語研究の分野において言語文化としての面を考えるべきではないかと思うに至った。たとえば，幼児語，成人語，老人語というようなものを考える時に，それらが同じ大きさの円をなすものと考えて良いのかという問題である。言語をどう見るかという言語意識を問題にすると，言語文化として中核をなすのは成人語であると考えるべきではないか。成人語とは位相的に異なる面を幼児語と考えるのであって，同様な立場で老人語や幼児語とは異なる成人語の特色を考えてみるということは出来ないのではあるまいか。

ここであらためて，田中章夫が本書の書名を『日本語の位相と位相差』としていることに感じいった。田中章夫は位相語という言葉を用いていないのである。第一章の「一．位相の構造」では，位相の重層構造については，

> 言語の位相的特徴は，実際の言語表現においては，種々の面からのものが，複雑にからみ合って重層的に働く傾向が強い。これが，位相というものの特性であり，現実の言語表現が，単一の位相的観点だけで割り切れるということは，あまり期待できない。むしろ，位相の，そうした重層的な作用を認めたうえで，位相差をもた

らした要因の強弱を分析していくべきであろう。

と述べ，位相差をもたらす要因として，

- 社会的位相
  - 性別によるもの
  - 世代によるもの
  - 身分・階層によるもの
  - 職業・専門分野によるもの
  - 社会集団によるもの
- 様式的位相
  - 書きことば・話しことばの差異によるもの
  - 文章のジャンル・文体の差異によるもの
  - 場面・相手の差異によるもの
  - 伝達方式の差異によるもの
- 心理的位相
  - 忌避の心理によるもの
  - 美化の心理によるもの
  - 仲間意識によるもの
  - 戦場心理によるもの
  - 対人意識・待遇意識によるもの
  - 売手・買手の心理によるもの

の３つを挙げ，それぞれで考えられる要因の例を示している。田中章夫は位相語というような形に現れたものではなく，位相差をもたらす要因を重視しているのである。

第一章は，ついで，「二．位相差の諸相」で，「言語の位相差は，こうした語彙的な面にばかりでなく，発音にも，語法にも，用字や文体にも，多かれ少なかれ生じるものであり，さらには，言語行動の様式や言語生活の内容においても，認めうる。」とし，発音，文法，文字などのそれぞれで，位相差のある例を示す。さらには，「三．位相の変化と変質」で，社会構造や生活様式の変化に伴って言語の位相が変容することを述べている。

田中章夫は，第一章において位相についての考え方を示し，位相差を多角的に考える視点から日本語の様相を明らかにしようとする本書の目的を明らかにしている。その点では，菊沢季生や真下三郎等の位相論とは異なるところがあり，今後問題にされるべき課題を投げかけたと言えよう。

三

次に第二章以降の構成を示すと，

第二章　性差と世代差

一．男のことば・女のことば

二．子どものことば・大人のことば

第三章　社会階層によることばの違い

一．宮廷・貴族のことば
二．女房ことばの流れ
三．武士ことば・お屋敷ことば
四．近代の階層差
第四章　社会分野によることばの特殊性
一．専門語・学術語
二．学校のことば
三．軍隊のことば
四．仏教のことば
五．六方ことばの広がり
六．遊里のことば
第五章　心理的要因によることばの違い
一．タブーと美化の心理
二．戦争心理・闘争心理
三．対人関係と待遇意識
四．売手の心理・買手の心理
第六章　表現様式・伝達方式によることばの違い
一．文章語と口頭語
二．詩歌のことば
三．手紙のことば
四．電話と電報
第七章　多人数向けのことば
一．一対多の場面のことば
二．新聞のことば
三．放送のことば
第八章　位相論の課題

のように八章に分かれており，最後に「おわりに」の文が加えられ，さらに「図表一覧」，「参考文献」，「索引」，「英文目次」が付けられている。

位相をもたらす要因として第一に挙げられた社会的位相のうち，性別によるもの，世代によるものが第二章「性差と世代差」の一，二となり，身分・階層によるものが，第三章「社会階層によることばの違い」となり，職業・専門分野によるもの，社会集団によるものが，第四章「社会分野によることばの特殊性」にほぼ対応しているわけである。また，心理的位相が第五章「心理的要因によることばの違い」に，様式的位相が第六章「表現様式・伝達方式によることばの違い」に対応しているように思われる。第七章「多人数向けのことば」は様式的位相の一部に入るべきものであろうか。

いずれにせよ,位相差とは認められないとした地域差の問題などは除いて,「はじめに」で述べられている「位相研究の立場からみた，日本語の姿を，まず，ひと通り描くことが，第一の課題と考えてみる。」という目標にしたがって，日本語の位相差の様相の全体を網羅的に取上げているのである。私は，菊沢季生以降位相語の全体をまとめるようなもののないことを気にしていたのであるが[注2]，本書はそのような期待に応えるものであった。

四

田中章夫が，非常に多くの資料，参考文献に目を通し，要領よくそのポイントとなるところを参照し，自身の研究を加えて，全体をまとめていることには驚かざるをえない。その点では本書は非常に圧縮された情報を伝えるものとなっている。その手法を示すために，ここでは，第二章を例にとって少し詳しく説明してみよう。

本書の「第二章　ことばの性差と世代差」は，注を含めて36頁にわたる。この章の最初は，国立国語研究所の1963年の松江市の調査を例とする。「落したハンカチを拾ってもらった時のお礼のことば」がどのようなものであったかを，アリガトウ型，スミマセン型に分け，男女と年齢によって違いの出てくることを明らかにした斎賀秀夫の図を図2-1として参照し，性と世代とが相互に関連し合って位相差を形成することの例証とする。これに川端康成の『伊豆の踊子』をサイデンステッカーが英訳したものを対照し，日本語の性格の一端を明らかにしようとする。ついで，やはり松江市の調査をまとめた林四郎「言語行動のタイプ」を図2-2として引き，言語行動の性差・世代差を明確にしている。

「一．男のことば・女のことば」では，図2-3（A）に『御堂関白記』，図2-3（B）に『紫式部日記』の影印を載せ，表記上で男女の差のあったことを示し，そのような男女の文体の違いが明治時代まで引き継がれたことを示すものとして，女子の作文・男子の当直日誌の文章を挙げている。図2-4は宮島達夫・西田直敏・向井清子等の調査をまとめ直して「古典作品の語種構成」とし，土屋信一の調査による図2-5「話しことばの漢語比率」を参照し，漢語的な表現が男性的なもの，和語的な表現が女性的なものとして意識されてきたとする。

現代の話し言葉で「情意表現を中心に，男女の間の語法・表現の差異」のあるものとして，男性「おお，みごとな景色だナァ」，女性「まあ，すてきな景色だコト」など10文ほどを対照しているが，あるいは作例であろうか。現代というにはやや古いように思われるものもないではない。

ついで，井出祥子の大学生の話し言葉の調査から，図2-6として「終助詞の男女使用比率」を挙げる。図2-7は，芝元一の現代小説の会話文の調査によって「人称代名詞の男女差」を挙げる。図2-8は，小松寿雄の『浮世風呂』の調査によって，［ai］の長音化

が男女によって異なることを示したものである。この後，女性の言葉を特色づけるものとして接頭辞の「オ」の使用の問題について触れている。

この後，宮崎みどりが女性の文章の特徴として指摘したことを述べ，井出祥子が木村治美の文章について述べた部分を引く。

さらに，明治期「テヨダワ言葉」の流行が当時の批判を受けたことを記し，特に女性の言葉に品格を求める例として敬語意識を挙げる。図 2-9 は国立国語研究所の 1965 年の調査から「女性の敬語」に対する意識をまとめたもので，1979 年の NHK 放送文化研究所の調査を援用する。一方，寿岳章子の論を引き，近年の男女対等意識の高まりに伴って，言葉の上での男女差が縮まってきているとする。また，川口容子の調査により職場の男女の言葉遣いが均質化しつつあることを，図 2-10「(いつ) 行くのか？」を，どういうかで示している。最後にフェミニズムの運動に伴うアメリカ，フランスの言葉の変化を，れいのるず・秋葉かつえの論によって引き，日本での職種名としてのスチュワーデスが変更されたことを毎日新聞の記事によって引いて結びとしている。

なお，［付記］として，図 2-11 に遠藤織枝の『中国の女文字』の例を加えている。

「二．子どものことば・大人のことば」も同様に，多くの論考，図を引きながら著者の考えを述べているわけであり，最後に，3 頁にわたり注を 30 ほど付けている。

第二章全体として，30 頁ほどの間に 20 以上の図表を掲げ(中には 1 頁を占めるものもある)，時にはかなり長い文章を引用している。年賀状の世代差など田中章夫自身の調査によるものもあるが，多くの図は他の研究者の手になるもの，もしくは田中章夫が他の研究者の調査を参照しまとめ直して，全体の論の中に位置付けたものである。自家薬籠中の物という表現があるが，まさにその巧みさには敬服した。もちろん，典拠が明示されているので，評者の立場としてはそれらの一々に当って原典と対照し論ずるべきかもしれないが，今その余裕がない。

五

以下は紙数の関係もあり，箇条的に興味のあるところ，問題があるのではないかと思うところを私の主観で取り上げてゆこう。

第三章は他とのバランスで言えば歴史的なことはやや少なめにし，近代以降の階層差をもっと詳しくすべきではなかったか。

第四章の社会分野による言葉については，なお取り上げるべき分野があるように思われる。ただ，この分野の語彙は広げればいくらでも増えてくるわけで，限定せざるをえなかったのかもしれない。「二．学校のことば」の中でキャンパス言葉が取り上げられているが，世代差の若者言葉との関連が問題となる。若者語について「集団語(第四章参照)の一種と見るべきものだが」(51 頁) として米川明彦の挙げた例を示しているが，むしろここに合わせて考えるべきではなかったか。「三．軍隊のことば」は小説や記録の例を多

く引き，スポーツ関係の用語への影響などを説明していて興味深かった。ただ，第五章の「二．戦争心理・闘争心理」で挙げられているところと合わせ考える必要があろう。「四．仏教のことば」は，日本の言語文化史における位置の大きさから言えばもっと詳述しても良い。逆に歴史的なことはもっと簡単にして，近代・現代における問題に中心を置くという方法もありえたように思われる。

第五章に心理的要因からの見方を入れている点は，菊沢季生の考えを受け継ぐものと言えよう。ただ，敬語の問題がここに入ってくることには違和感もある。その点では，「四．売手の心理・買い手の心理」に取り上げられている語彙や表現についても同様な感じがする。このような問題を位相語の問題と考えるかどうかは，位相というものをどのように考えるかによって違ってこよう。ただし，ここで取り上げられている言語的事実は，これまであまり言語研究の対象としては問題にされていなかったことで興味深く感じた。

第六章の「表現様式・伝達方式によることばの違い」の前半は，これまで，口語，文語，雅語，歌語などと呼ばれたものである。これに対して，「三．手紙のことば」，「四．電話と電報」を位相の問題として考えるというのは新しい視点である。一方，第七章の「多人数向けのことば」として取り上げられている，放送，テレビ，新聞，落語，演説などの言葉も伝達方式による違いと考えることが出来よう。従来は，言語生活，言語行動の中で考えられることが多かったように思う。

第八章の「位相論の課題」では，言語に対する意識や考え方の差異，コミュニケーションのあり方やタイプの差，言葉の史的変遷をとらえる上での位相上の問題，言語の改良や規制に対する考え方の違いの問題などを挙げている。ここでは，田中章夫が積極的にいろいろな問題を位相論の課題として取り込んでゆこうとする姿勢が窺える。

巻末に英文目次の付けられていることは有り難い。索引は私にとっては語彙索引を付してもっと詳しくしてもらえれば嬉しかった。参考文献の挙げ方も適切である。図表一覧もこの書にとっては必要なものだと思う。

六

以上，繁簡よろしきをえない主観的な文章となったが，まとめに入りたい。

本書は多くの研究文献・参考資料を参照しつつ，著者の識見によって，図・表・引用を巧みに配置している目配りの良さが高く評価される。それぞれの章・節は，その分野のこれまでの研究状況を概括したもので，現在の研究の成果を示すとともに今後の研究の出発点を示すものである。他方，位相差を考えるということは，同じ言語事象に対してもいろいろな観点から考えることが出来るということにもなる。社会的位相，様式的位相，心理的位相というのは排他的な分類ではなく，重なり合う関係にある。田中章夫の言う位相の重層構造を認めるかどうかは，位相論をどういうものと考えるかによって

違ってくるのである。位相論の考え方によって，本書で取り上げたことのうちで省かなければならないものがないか，加えるべきものがないかが決まってくる。

本書はまさに情報を著者の立場で整理したもので，それをどう受け止めるかは読む側に委ねられている。歴史には事実をして語らしめよという立場があることを思い出した。研究書の現代的な在り方の一つと思われたのである。本書の整理によって，位相論を考える基盤が出来たと言えよう。

注1　幼児期の語彙体系をどのように考えるべきかについては，なお考えるべきところが多い。前田富祺・前田紀代子『幼児の語彙発達の研究』（昭和58年　武蔵野書院）参照。

注2　私が『講座日本語の語彙1　語彙原論』の企画をした時に，島田勇雄への依頼は「位相語彙論」であって，その全体の概観を期待していたのであるが，島田勇雄は国語学と社会学等との学際的部門としての「位相論」を提出された。私は電話で話し合ったが，その考えを聞き了承したのである。

（1999年9月20日発行　明治書院刊　A5判　352ページ　本体価格12,000円）

——神戸女子大学教授——

（2001年9月21日　受理）